

昭和の南海地震体験談

氏 名:川下 崇(かわした たかし)

生年月日:昭和3年5月1日

地震を体験した場所:海南市冷水・自宅前の
小川岸

当時の家族状況:父、母、弟(14歳)



1) 地震発生時の状況

当時18歳で、予科練から戻り家業の船大工の仕事をしていた。自宅で就寝していたが目が覚め、自宅前の小川岸に立っていた時に揺れ始めた。「何？」と驚き、下を見ると川の石垣で造られた壁が前後に動き、上を見ると家が被さってくるようだった。後を向いて逃げようとしたが、足が思うように動かず、這って後方の石垣まで行った。大きく横に揺れていたため、石垣に掴まなければ立てなかった。そのまま揺れが収まるのを待った。

2) 津波襲来時の状況

早朝でまだ暗い時間だったので、もう一度布団に入り寝ることにしたが、「坂の上の方で津波が来るて言うちやあるで」と母が父に言っているのを聞き、すぐに着替えて、父と100m程坂を下りた浜にある仕事場に走った。その時、足元に水が溜まっており、仕事用のゴム草履では歩き難い程だった。浜のガンギ(船を昇らせる場所)まで行くと、凄い勢いで潮が引いている状態だった。ちょうど第1波が来て、引くところだった。地震から30分も経っていなかっただろう。浜の中にはいつも漁船が何十隻とあるが、その時点で隣の船が1隻しか残っていなかった。それも引き潮により、ロープが切れ、ひっくり返り流れて行ってしまい、船が無くなった。おそらく船の持ち主は沖に避難したのだろう。仕事場に入っていくと、父が船を作る工具を片付けていた。「自宅に持って行け」と言いつけられたので、工具を抱え自宅との間を2往復した。仕事場にはちょうど正月前に進水式をする予定の船がたくさんあった。これなら沈まないし濡れないだろうと、残りの工具や道具を全て積み込んだ。それが終わると、前の広場に積んでいた船の材料をロープで縛り、杭を打って固定した。漁師が近くで焚き火をして海の様子を見ていたので、作業をしながら世間話をしていた。海を見ると、関電から和歌山市の住金方向に、まるで高圧線がショートするようなピカピカーツという光が見え、ドーンという、発破をかけたような音が聞こえた。それらの現象は等間隔に光ったり、聞こえたりし、そして潮が引いていき、やがて、黒江湾が空っぽになってしまった。堤防からは、引いた潮が滝のように流れ落ちていた。海水が無くなり剥き出しになった海底が見えた。よく見ると、深い位置に避難が遅れたと思われる船が据わってしまっていた。2人乗っていたが船を降り、陸に向かって海底を歩き出した。無事にたどり着けるか心配しながら作業を続け、万全にしたところへ第2波が来た。心

配していた2人を探すと、無事石垣をよじ登り、お寺の裏へ上がったところだった。それを見て安心していううちに、どんどん潮が増えてきた。さほど恐くはなかったが、沖の方で潮が白波を立てて押し寄せてきた時はドキッとした。堤防より何倍も高い潮が下から盛り上がってくる。

足元にはまだ潮は来ていなかったが、避難しようと父に声を掛け、先に父を走らせた。ちょうど自宅へあと半分、50mの場所に来た時、川のそばだった。後から追いかけてくる潮と、川から盛り上がった潮、小路を伝ってきた潮の3方に追いつかれ、すねの半分まで浸かるともう走れなかった。急遽、山道に入ることにし、這って入り、山道を上がって、今度は上から様子をみることができた。漁師2人も避難していて、一緒にいた。潮が帯になって、黒江湾



から日方、内海の方向を時計回りに左肩上がりにぐるっと湾の中を回ってきて、冷水まで来た時に湾の中が一杯になった。一瞬荒れていた海岸線が池のように凪いでしまい、何もかも水に埋まってしまった。そして、「ドォーン」と腹に響く音がしたと思ったら、潮が引き出した。物が

流れてきたので引き出したと判った。日方川が一番多く流れて来た。家具、倉庫、タンス、樽、ドラム缶……。屋根や船に乗って「助けてくれー！」と助けを求めながら流れていく人も目撃した。どうすることもできないまま、地獄絵図を見ているようだった。当時、海の埋めたての為のサンドポンプが取り付けられていたが、引き潮の勢いではずれてしまい、仕事場を向いて流れて来てヒヤッとしたが、諏訪の先の岩に当たり、沖の方に流れた。ホッとして仕事場を見



ると、ゆっくり動いていた。引いてしまった後に山から下り、様子を見に行ったところ、隣近所の家がひっくり返ってしまって、内の1軒は潰れてしまっていた。仕事場はどうする事もできなかったが、幸いなことに進水式前の船の端が石垣に引っかかり止まっていた。第3波が来た時には、再び横に動き、石垣に沿って止まり据わったので、流失せずに助かった。よく判らないが、津波は4回来たのを目撃した。第2波が一番大きく、3波、4波は等間隔で来た。昼までには収まったが、海ではまだ潮が右回りにくるくと回っていた。

3) 家族の行動・被害

父は先を走っていた為、潮に追いつかれることなく高台にある自宅に戻り、母と弟と共にいた。高台の為、自宅に被害は無かった。仕事場は流されて数m移動したが、海が落ち着いた頃、下津から親戚で進水式の船の依頼主でもある漁師が心配して20人程度を連れて様子を見に来てくれ、その人達が仕事場を元通りにしてくれた。どうするかを考えあぐねているところ

だったので、嬉しく幸せに感じた。地震による被害はなかった。

4) 集落・周囲の被害

地域に死者や不明者等の人的被害は無かった。仕事場近くの家屋が1軒潰れた。堤防にある1.5m程の波除が、海側に壊れて倒れていた。津波は引き潮の方が勢いがあったと思った。

5) 地震・津波後の生活

親戚の助けにより、仕事場の移動や修理がすぐにでき、道具や工具の流失や損壊も無かった為、仕事をすぐに再開できた。船の修理の件数が増え、忙しかった。自宅に被害が無かった為か、元通りの生活に戻れた。水や食料に関しては変化なく、地震以前と比べて不自由は無かったと思う。

6) 次の災害への備え

海拔8mの高台の土地に引っ越した。家族とは、避難場所や非常時について話をしている。非常用の物資は、いつでも使用できるようにまとめて常備し、年1回、防災の日に電池の交換や消費期限の点検、作動確認等をしている。米は予備を置くようにしている。